

大和 ひと 点描

国産の材木価格の低迷や過疎化の影響で手入れが行き届かない山林の現状を改善しようとして、林業に従事する立場から、「奈良森守プロジェクト」を立ち上げた。

同世代の森林ジャーナリストで生駒市在住の田中淳夫さんら5人がメンバー。昨年7月、まずは山林を所有する人たちに関心を持ってもらおうと、「第1回森林管理セミナー(初級編)」を開催した。日本の林業の現状や今後の民有林の展望について知ってもらう内容に定員を超える大勢の人たちが集まり、関心の高さを実感した。「山林を資産として残せるような山作りのお手伝いをしたい」と語る。

山の所有者に代わって山を管理する「山守」が代々の家業。祖父の死や結婚をきっかけに、林業を継ぐため務めていた造船会社を退社、生まれ育った吉野に戻った。27歳のときの決断だったが、これが苦難の始まりだった。

吉野の木材価格は、この時期をピークに下落。20年あまりで10分の1近くまで下がった。

奈良森守プロジェクト代表 今西 秀光さん(49)

吉野の材木生かす山作りを

た。「山守はほとんど壊滅状態。とても食べていけなくなりました」

そんな厳しい状況のなか、ある異変があった。「親から山を相続したが、所有地の境界が分からない」という相談をたびたび受けるようになったのだ。

山の境界線は、国土調査法に基づいた地籍図があれば問題はない。しかし、多くは明治時代に庶民の手で作られたあいまいな「公図」。「縮尺も方位もない、単なる見取り図」という。

隣接者との暗黙の了解で境界が設定されているケースが多いため、山仕事をしていく親から山を相続しても、いざ山に入ると、どこが境界線か分からなくなってしまうのだ。

「自分の山の位置や範囲が分からないことも、山林が管理されなくなった大きな要因ではないか」と考え、平成5年、GPS(人工衛星による位置測定システム)を使った測量の研究を始めた。

母校の国立奈良工業高等学校で「奈良県林業におけるGPS技術の応用について」をテーマに発表するなど研究を続け、2年前、安価で測量できる「山林管理用GISシステム」を完成。枝打ちなどの作業だけでなく、山の

門学校で「奈良県林業におけるGPS技術の応用について」をテーマに発表するなど研究を続け、2年前、安価で測量できる「山林管理用GISシステム」を完成。枝打ちなどの作業だけでなく、山の

誇った。だが、近年は木材の産地にまで関心を持つ人が減り、柱や梁を露出する住宅も減った。

価格低迷にブランド認知度の低下。吉野林業が受けた打撃はあまりに大きい。なんと

「柱に頼



「いま伐採している立木は先祖たちの血と汗の結晶。吉野の材木がもっと必要とされる後世のため、良い山を残していかなければ」。そんな思いが活動の支えとなっている。

(川西健士郎)

吉野町生まれ。国立奈良工業高等学校電気工学科卒業後、川崎重工入社。船を修繕する電気技師として5年間務めたあと、林業を継ぐため吉野に帰る。現在は吉野森林管理サービス代表。

境界線の記録も仕事として手がけるようになった。

□ □

長い年月をかけてゆっくりと育つ吉野のスギやヒノキは頑丈で、定期的に枝打ちをするため節がなく、和風建築の化粧用材として絶大な人気を